

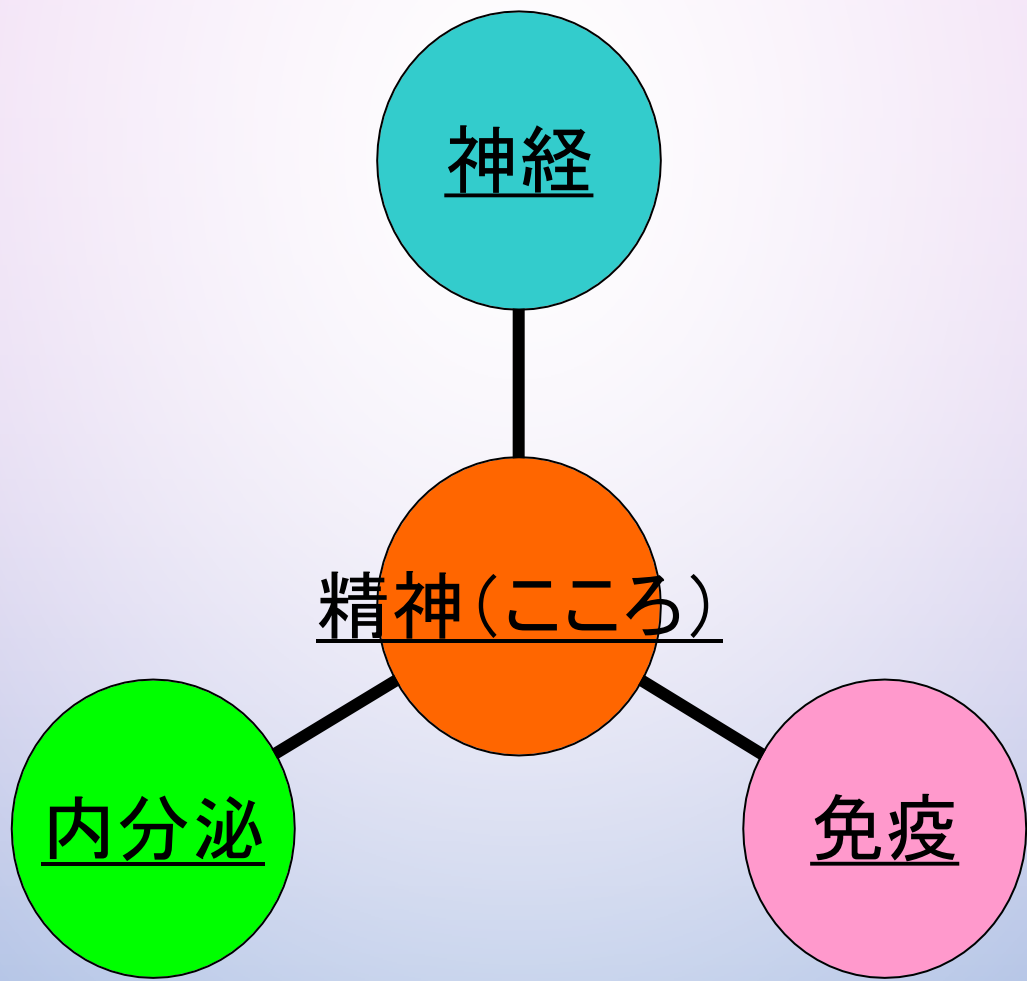


ホリスティック医学と身心変容技法 ～心療内科医の経験と視点から

NPO法人日本ホリスティック医学協会常任理事

赤坂溜池クリニック院長

降矢 英成



統合医療、ホリスティック医学、 代替療法とは？

- **統合医療** (Integrative medicine) : 現代医学と代替療法を併用・統合する
- **ホリスティック医学** : 全体的 (Holistic) な視点で患者・病気を診る (BODY-MIND-SPIRIT)
- **代替療法** (Alternative medicine) : 現代医学以外の療法 (“持続可能な” という意味も含む ~ 代替エネルギー、代替農法)。またヨーロッパでは補完医療 (Complementary medicine) とも表現される

CAM (欧州・米国) → CIM (補完統合医療) へ

ホリスティックとは Holistic

- ギリシャ語のholos(全体)を語源
- 派生した言葉
 - Whole(全体の)、Heal(治癒)、Holy(聖なる)、
Health(健康)～Heal(癒えた)-th(状態)
- Holism(全体論)の形容詞
- 「関連」「つながり」「バランス」といった意味も含む
- BODY-MIND-SPIRIT(体 - 心 - 霊性)

ホリスティック医学の定義

(NPO法人日本ホリスティック医学協会)

- 1、ホリスティック(全的)な健康観に立脚する
- 2、自然治癒力を癒しの原点におく
- 3、患者が自ら癒し、治療者は援助する
- 4、様々な治療法を選択・統合し、最も適切な治療を行なう
- 5、病の深い意味に気づき、自己実現をめざす

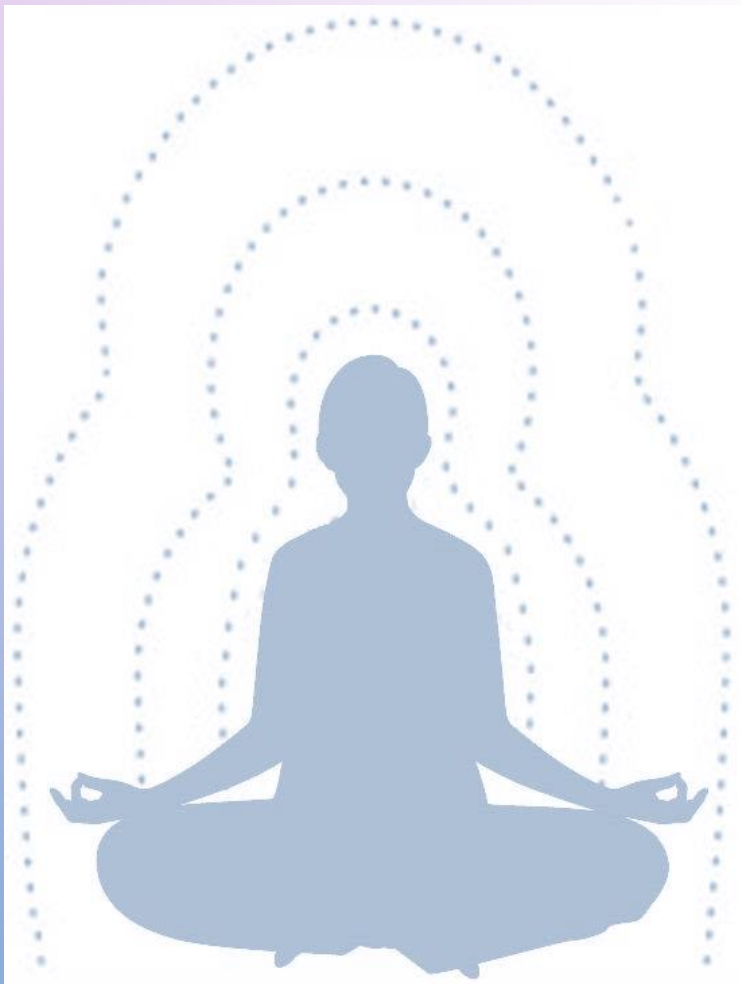
1、ホリスティック(全的)な健康観に 立脚する

- 人間を「体・心・気・霊性」等の有機的統合体ととらえ、社会・自然・宇宙との調和にもとづく包括的、全体的な健康観に立脚する
- CF) BODY-MIND-SPIRIT
MIND-BODY-SPIRIT
SPIRIT-SPIRIT-SPIRIT
SOMA-MIND-SOUL-SPIRIT
SOIL(土)-SOUL(魂)-SOCIETY: サティシュ・クマール

環境～健康へ大きな影響を与える

- 社会環境
 - 家庭 家族、住居
 - 職場(学校)
 - ストレス要因 人間関係、仕事の質、仕事の量
 - 地域(コミュニティ)
 - 国家
- 自然環境
 - 都市と地方
 - 気候風土
 - 地球 地球生命体・ガイア(ジェームス・ラブロック)
 - 宇宙

東洋の伝統的な「いのち」のとらえ方は、 もともとホリスティック



- 気(中医学)～経絡、経穴
- プラーナ(アーユルヴェーダ)
～チャクラ
- ルン(チベット医学)
- エネルギーとしての体(見えない体)

「ボディ」「マインド」「スピリット」3つの全体性



- BODY～体。身体。物質としての存在。物質的事象を知覚する感覚器官を備えた肉体。心と魂の器。
- MIND～心。感情や精神の領域。情念、理性、知性などの精神的機能を有する。顕在意識と潜在意識の一部。
- SPIRIT～魂。心と身体に宿り、身体の活動や心の働きを司る非物質的なもの。語源であるラテン語のSPIRITUSは、「息」「呼吸」を意味し、転じて「生命の原理」と理解される。ひとつの存在の本質的なもの、その存在を生かすもの、自ずと発散されるものを表す。

2、自然治癒力を癒しの原点におく

- 生命が本来、自らのものとしてもっている「自然治癒力」を癒しの原点におき、この自然治癒力を高め、増強することを治療の基本とする

アンドルー・ワイル博士



- 現在、アリゾナ大学医学校教授、統合医学プログラム部長
- ハーバード大学医学校卒業後、国立精神衛生研究所の研究員、ハーバード大学植物博物館の民族精神薬理学研究員などを務める
- タイム誌「最も影響力をもつ25人の米国人」に選定
- 『人はなぜ治るのか』（日本教文社）
- 『ワイル博士のナチュラル・メディシン』（春秋社）
- 『癒す心、治る力』（角川書店）
- 『ヘルシーエイジング』（角川書店）

ワイル博士が世に問うた話題作

ナチュラルメディスンの
家庭医学書

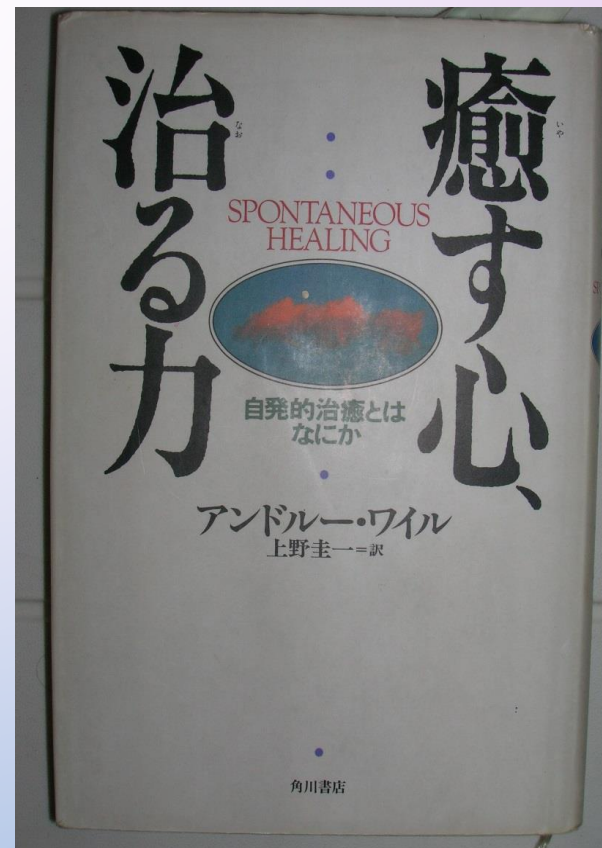
治癒と健康のメカニズム

メディカルハーブも詳しく記述



ホリスティック&ナチュラルでは
「アンチエイジング」とは
言わない・・・

ワイル博士渾身の力作
自発的治癒・治癒系
について



癒す心、治る力(SPONTANEOUS HEALING)

第1部 治癒系

1章 熱帯雨林からのプロローグ

2章 わが家の裏庭で

3章 素人の治癒体験

4章 医学のペシミズム

5章 治癒系

6章 ころろが治癒に果たす役割

7章 治癒の道(夕オ)

第2部 治癒系を最大限に活かすには

8章 治癒系を阻害する八大要因

9章 治癒が起こりやすい食生活

10章 有害物から身を守る

11章 治癒力を高めるくすり

12章 活動と休息

13章 ころろと霊性のはたらき

14章 2ヶ月で治癒力を高める

第3部 もし病気になったら

15章 治療法の選び方

16章 代替療法の選び方

17章 賢い患者の七大戦略

18章 この病気にはこの方法を

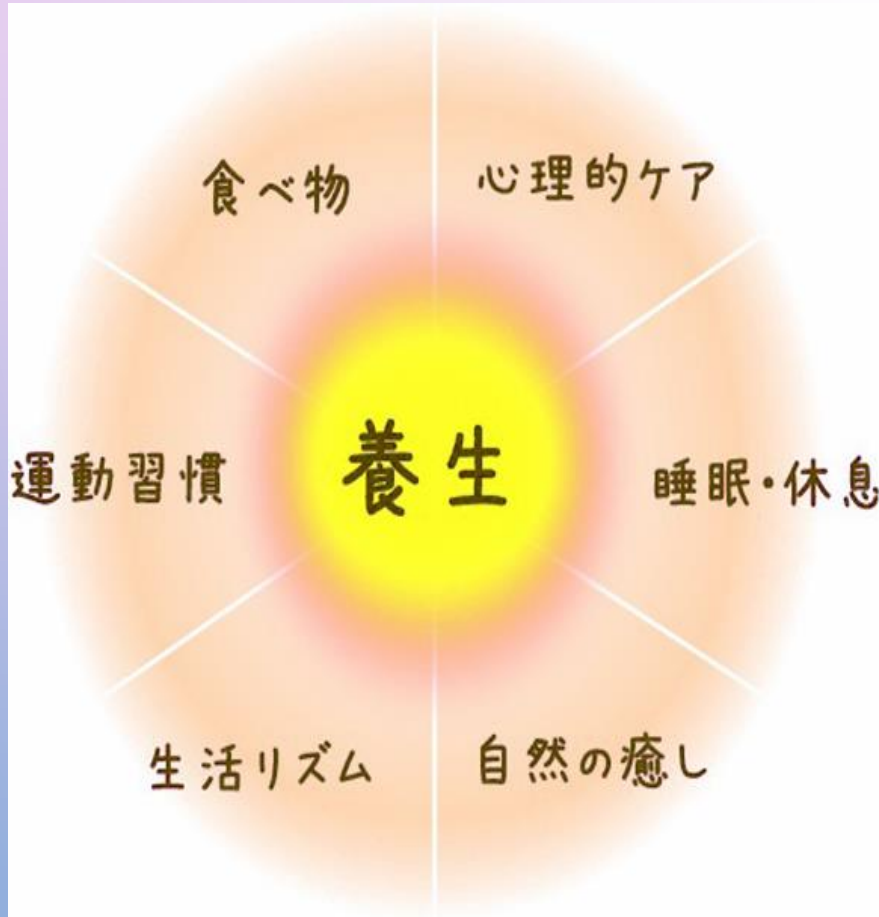
19章 特殊ケースとしての〈がん〉

おわりに 社会への処方せん

3、患者が自ら癒し、治療者は援助する

- 病気を癒す中心は患者であり、治療者はあくまでも援助者である。治療よりも養生、他者療法よりも自己療法が基本であり、ライフスタイルを改善して患者自身が「自ら癒す」姿勢が治療の基本となる

いのちを養う「養生」

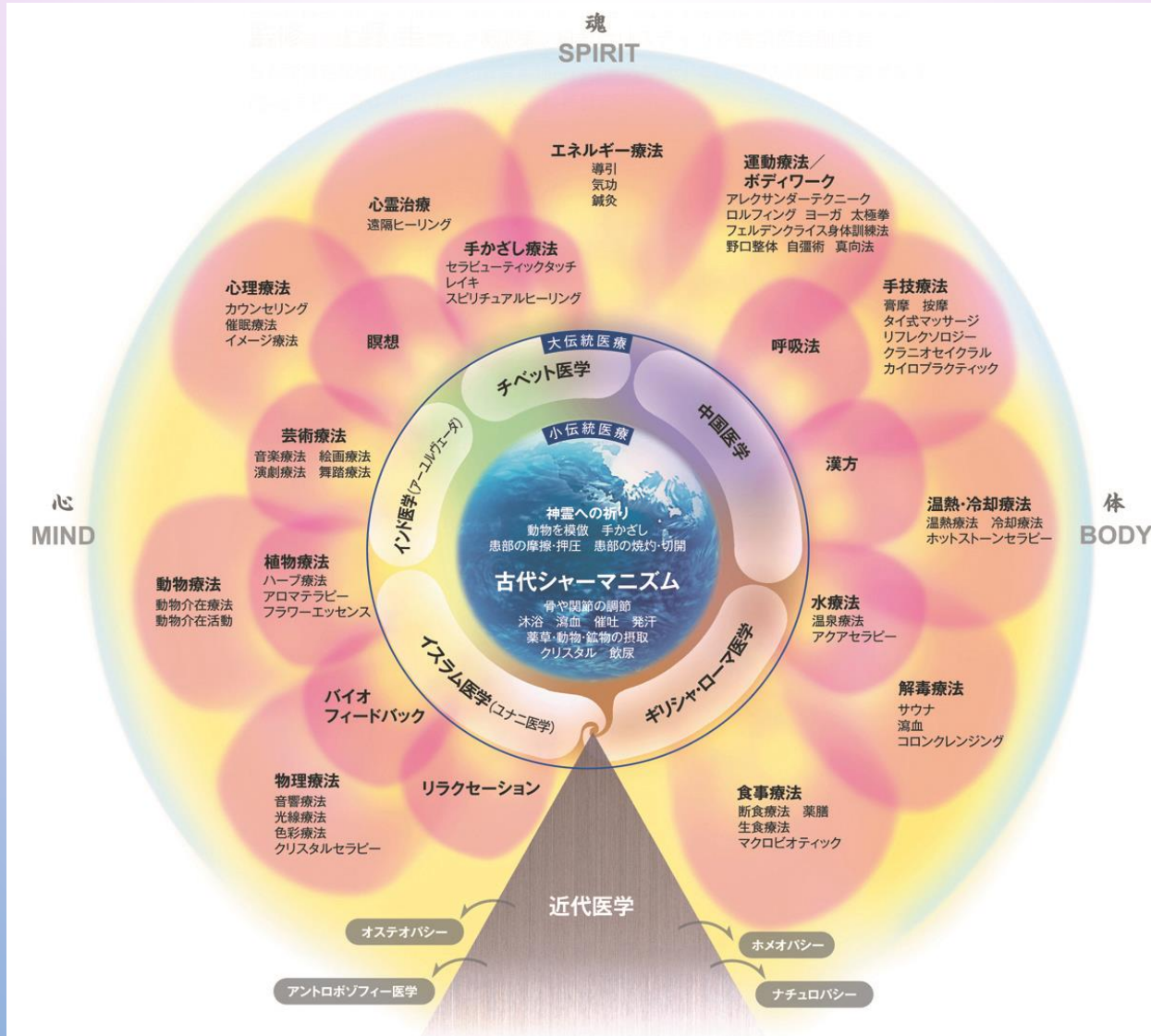


- 「病氣」の治療にとどまらず
- 「生命力」そのものを養う
- 食養生
- 体の養生～規則的な生活、持続的な全身運動
- 心の養生～休息と睡眠
- 呼吸を整える
- 「いのちのエネルギー」全体を高める

4、様々な治療法を選択・統合し、 最も適切な治療を行なう

- 西洋医学の利点を生かしながら、中国医学やインド医学など各国の伝統医学、心理療法、自然療法、栄養療法、手技療法、運動療法などの各種代替療法を総合的、体系的に選択・統合し、最も適切な治療を行なう

ホリスティックな視点からの「代替療法」 (「ホリスティックヘルス塾」テキスト)



5、病の深い意味に気づき、自己実現をめざす

- 病気や障害、老い、死といったものを単に否定的にとらえるのではなく、むしろその深い意味に気づき、生と死のプロセスの中でより深い充足感のある自己実現をめざしていく

「生老病死」のナチュラル・ヘルス

【「ヘルシーエイジング」とは】

【病の深い意味に気づき 自己実現をめざす】

- 「アンチエイジング」に対して、ワイル博士が提唱
- 老化は決して逆転できるものではない
- 重要なのは、単に寿命を延ばしたり、若返りの薬を求めて奔走することではなく、
- 老化を受け入れ、いかに健康的に、優雅に(gracefully)に歳を重ねていくか
- 「病や老い、死」といったものを、単に否定的にとらえるのではなく、
- むしろ「哀しみ」や「苦悩」の意味を理解することによって、価値感、納得感のある人生を目指していく
- “光”と“影”の両方で「全体」
- 影も含めた人生をしっかりと生きる
⇒「自己実現」へ

ホリスティックな治療方針の 基本的な順序(本宮輝薫氏案)

①ライフスタイル・生活習慣の改善

阻害要因を軽減、養生・セルフケア

②バランス回復、自然治癒力を高める治療

代替療法、自然療法

③対症的、西洋医学的治療

①, ②で改善がない場合

④心や気、霊性への治療

心身相関、気・エネルギー、波動の視点

療法提供者の立場、所属

～ 医師法、混合診療の問題点を解決するために

- 1、医師法に違反せずに代替療法を実践する
- 2、混合診療にならずに代替療法を実践する

- 医療資格の療法家→クリニックに所属

医療行為、医業類似行為として(鍼灸、指圧・按摩(整体)、栄養相談、アロマセラピーなど)

- 民間資格の療法家→付属の有限会社に所属

療術、セラピー、健康法として(心理療法、催眠、ヒーリング、整体、メディカルハーブ、アロマトリートメント、オイルマッサージ、エサレンマッサージ、リフレクソロジー、波動測定など)

ホリスティックなチーム医療、ネットワーク医療に必要な要件

- 連携、コミュニケーションがとれること
- 普通レベルの技量があること
- 自分の専門外の治療法についての知識をある程度もっていること
 - 他の治療法(現代医学)を否定しないこと
- ホリスティック医学、統合医療の知識をもっていること
 - 単なる併用療法にならないこと
 - 船頭多くして船進まずにならないこと…

心身相関・心身医学への流れ

- アメリカの近代心身医学のENGEL

1977「病気」中心の「生物学モデルbiomedical model」



「病人」中心の「身体的・心理的・社会的bio-psycho-social model」へ

- さらに、池見酉次郎(九州大学)が「生命倫理Bioethics」の観点を考慮した「bio-psycho-socio-ethical (spiritual)」なアプローチが心身医学のこれからの姿と提唱

心療内科における ホリスティック医療の必要性

①心理面の深いケア

→心理療法の必要性

②自律神経失調へのケア

→東洋医学、整体的なケアの必要性

③「癒し」の観点からのケア

→各種セラピー(アロマセラピー等)の必要性

④「西洋薬以外の薬」の必要性

→植物療法、エネルギー的観点からの処方

心身医学的な治療法

鈴木仁一氏の表を改変

1、身体療法	10、筋弛緩法	19、遊戯療法	28、絶食療法
2、生活指導	11、簡便型精神分析療法	20、箱庭療法	29、森田療法
3、一般心理療法	12、標準型精神分析療法	21、音楽療法	30、内観療法
4、カウンセリング	13、交流分析	22、読書療法	31、鍼灸療法
5、薬物療法	14、行動療法	23、集団療法	32、ヨーガ療法
6、ソーシャルケースワーク	15、バイオフィードバック	24、ゲシュタルト療法	33、禅的療法
7、催眠療法	16、認知療法	25、生体エネルギー療法	34、気功法
8、自律訓練法	17、家族療法	26、ロゴセラピー	35、温泉療法
9、自己調整法	18、作業療法	27、バリント療法	36、森林療法

4つの象限から世界を観察する インテグラル(統合)理論～byケン・ウィルバー

<p>左上象限 内面的・個的 主観(美)～心理、芸術</p> <p>私(一人称・単)</p>	<p>右上象限 外面的・個的 客観(真)～科学、経済</p> <p>それ(三人称・単)</p>
<p>私たち(二人称・複)</p> <p>間主観(善)～文化・倫理 内面的・集团的</p> <p>左下象限</p>	<p>それら(三人称・複)</p> <p>社会～制度・システム 外面的・集团的</p> <p>右下象限</p>

視点	意識の基本構造	特徴的な病理	治療の形式
— : クリアーライト	非二元	—	—
F9: ウルトラヴァイオレット	元因	元因的病理	無形神秘主義
F8: ヴァイオレット	微細	微細的病理	神性的神秘主義
F7: インディゴ	心霊的	心霊的障害	自然神秘主義
F6: ターコイズ ～この間がティール～	ケンタウロスの =統合段階	実存的病理	実存的セラピー
F5: グリーン	形式的・反省的	アイデンティティ神経症	内省
F4: オレンジ	規則／役割的	脚本病理	脚本分析
F3: アンバー	表象的心	精神神経症	暴露的技法
F2: レッド	空想的・情動的	自己愛的境界例	構造・構築技法
F1: マジェンダ	感覚的物質	精神病	生理的／鎮静的
F0: インフラレッド	一次的母胎	分娩病理	退行的セラピー

心身から「身心」へ

ソマティック心理学・心理療法(身体心理学)

- 「心」の状態が「身」へ影響する
⇔逆に「身」の状態が「心」に影響することにも留意
- 本当の「心」の状態はなかなか自分では把握できない
→「ボディランゲージ」という言葉もあるように、「身」の状態をチェックすることで自分の「心」の状態を理解

「身→心」の方向に働きかける方法

- 特に「トラウマ」の対処に対しての有効性が高い
 - ①(「顕在意識」ではなく)「潜在意識」にアプローチする
 - ②(「思考」ではなく)「感情」にアプローチする
 - ③(「心」ではなく)「身体」にアプローチする

ソマティック・スピリチュアリティ(身体的靈性)



1、狭義のソマティック心理学

「心理療法」としてのソマティック心理学

「身体心理療法」

2、中義のソマティック心理学

「気づき」のためのソマティック心理学(身体教育/心身教育)

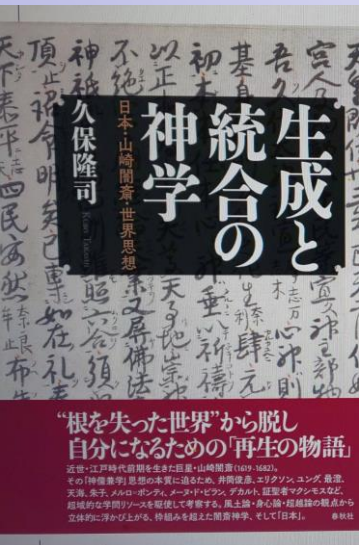
ソマティクス(ボディワーク)、ダンス/ムーブメント、身体心理療法

3、広義のソマティック心理学

「身体性」に根ざした「精神性」や「靈性」の発達

~「ボディーマインドースピリット」の統合

「ソマティック・スピリチュアリティ」(身体的靈性)



科研費研究を『身心変容技法シリーズ3巻』に 鎌田東二京都大学名誉教授



- 第1巻は、『身心変容の科学～瞑想の科学』というテーマで、「身心変容」の基盤として「**瞑想**」、特にマインドフルネス瞑想を取り上げて、その科学的な追究の最先端を紹介
- 第2巻は、シリーズの中核になっており、具体的に、キリスト教神秘主義、**仏教**、**チベット密教**、イスラーム神秘主義・スーフィズム、羽黒修験、莊子、太極拳、**世阿弥**など
- 第3巻は「医療」がテーマとなっていて、心身医学・認知行動療法、東洋医学、中国養生学派、心理療法(特にユング心理学)、**音楽療法**、ヒルデガルトの**音楽**、シャーマニズムなど

「身心変容技法」→「身心(魂)変容技法」



● 「体は嘘をつかない。が、心は嘘をつく。けれども、魂は嘘をつけない」

(鎌田東二)

- 私が研究領域としている「身心変容」あるいは「身心変容技法」という観点からすると、

病がもたらす「身心変容」は(注: 修行や芸術のような技法ではなくても)

- フィジカル面では不可抗力と言えるが、同時にメンタル面やスピリチュアル面ではそれを一つの警告とか啓示とかメッセージとして受け止めて、違う生き方や在り方に変容させる可能性を持っている

- 「身心変容技法」は、もともと「スピリット/スピリチュアリティ」の変容も含んでいるものの、このままではその真髓が伝わらない危機感があり、**今後はあえて「身心魂(霊)変容技法」と表記する必要を、鎌田先生はお感じになっている**

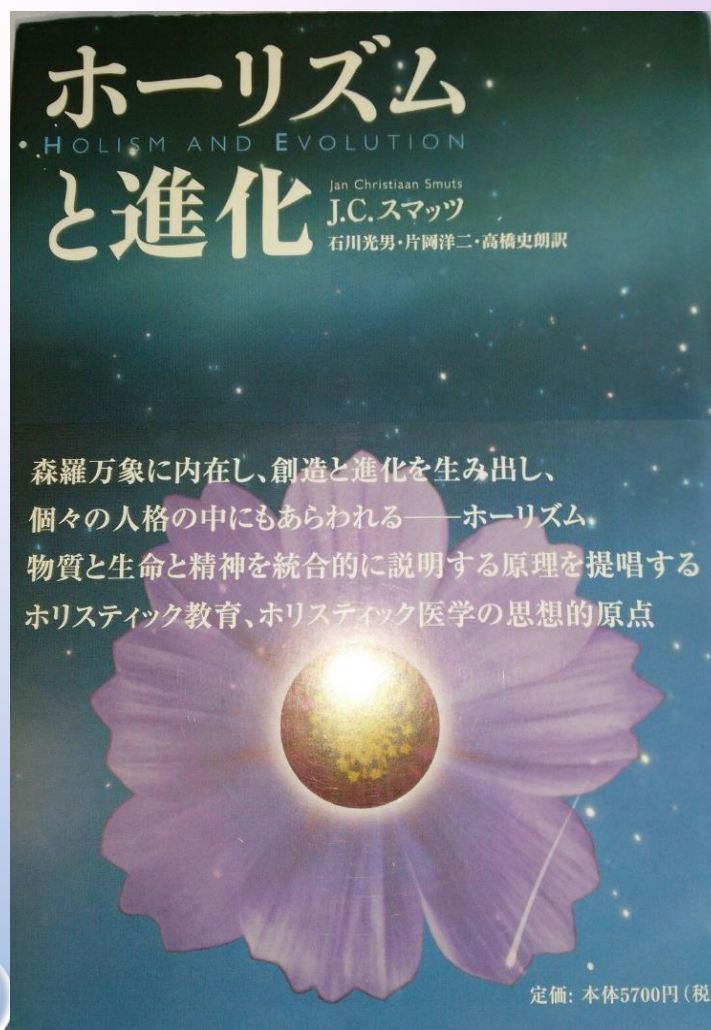
...



J.C.スマッツと『ホーリズムと進化』

目次

- 第I章 基本的な概念の是正
- 第II章 時間と空間の新たな概念
- 第III章 物質についての是正された概念
- 第IV章 細胞と有機体
- 第V章 ホーリズムの一般的概念
- 第VI章 ホーリズムの機能と基本原理
- 第VII章 機械論とホーリズム
- 第VIII章 ダーウィン説とホーリズム
- 第IX章 全体の器官としての心
- 第X章 全体としての人格
- 第XI章 人格のいくつかの機能と理想
- 第XII章 ホリスティックな宇宙



- 最終的にホーリズムと呼ばれるこの要因は、宇宙における生成の傾向の基礎となり、宇宙における種々の全体の発達と起源に寄与する原理である
- ここで試みられているのは、全体の形成、あるいはホリスティックな傾向は、自然における基本的な性質であり、確かめ得る著しい特性であり、さらに、進化とは、無機物の起源から精神的な創造という最高のレベルに至るまでの一連の全体の漸進的な階層に過ぎないことを示すことである
- この著作は、物質と生命と心についての我々の主要な概念をこの原理に照らして考え、進化に関するいくつかの問題を、この新しい視点から議論している

第V章 ホーリズムの一般的概念

- この世界では、ただ漠然とした不確定な創造的エネルギーあるいは傾向というものは存在しない。このエネルギーまたは傾向は、特別な性質をもっており、その最も基礎的なものは全体の形成である
- そして、あらゆる段階で結果として生じる全体の進歩的發展—最も未完成で不完全な無機的全体から最も高度に発達し、組織化された全体に至るまで—は我々が進化と呼ぶものである、ホーリズムはその発達の背後にある内的な駆動力である

第Ⅷ章 ダーウィン説とホーリズム

- ホリスティックな選択は、単なる生物の間で働く自然淘汰、「すなわち」生存競争と呼ばれるものとは本質的に異なっている。ホリスティックな選択は、はるかに微妙な働きであり、その作用も非常に社会的で、友好的である
- ホーリズムは創造的であると同様にしばしば抑制的である。、このようにして生物全体のバランスのとれた変動と進化を確保する
- この世界は根底においては友好的な宇宙であり、その中では組織化された寛容な共存が原則となっており、通常、自然淘汰は友好的で、社会的協調性、そして相互支援という形をとる

90年頃、ワイル博士も各地で登壇
21世紀はエネルギー医学の時代である!?



「西洋医学」と「エネルギー医学」の 基本的な構造

西洋医学		エネルギー医学
物質・見えるものが中心	医療 の 現場 (ホリスティック) (統合)	エネルギー・見えないものが中心
科学的・分析的(分別知) エビデンス		体験的・無分別智 ナラティブ
機械論		生氣論(生命論)
ボディ・(マインド)		スピリット・マインド・ボディ

「エネルギー療法」の分類

①ハンズオン型

- タッチ、手かざしなど、いわゆる「手(ハンド)」を用いて、患者の気やエネルギーを調整する療法

②レメディ型

- ホメオパシーやフラワーエッセンスやいわゆる波動水のように、口から「エネルギーの媒体」(レメディ)を摂取する療法

③色、振動型

- 「色」を経絡、経穴に当てたり、「音叉」などで振動を与えたりして、気やエネルギーを調整する方法

④デバイス(機器)型

- いわゆる機器(デバイス)を使って気やエネルギーを調整する療法

『エネルギー医学の原理 その科学的根拠』

ジェームズL・オシュマン
帯津良一監修
エンタプライズ



人体の「情報」の流れ

- 生体内での情報交換には、おもに2つの方法
- 1つは化学的方法、もう1つがエネルギー

- 「化学的」な情報伝達～ホルモン類、種々の「因子」(成長因子、上皮増殖因子など)

EX)ホルモンなどの体内物質の「拡散」というプロセスはそれほど早く進むものではないので、まだよく分かっていない「体内の迅速な反応」を説明することができない

- 「エネルギー」での情報伝達～電気と電子の2種類

電気、電子を用いる「生体マトリックス」は“高速情報通信”ネットワーク

エネルギー薬理学

- 振動療法の原理 振動療法の背景にあるのは、「疾患時や何らかの障害が起きると、分子、細胞、組織および臓器・器官の電磁氣的性質が変化する」という原理で、自然物質の電磁波によって薬と同等の、場合によっては薬以上の効果が現れる
- この手法を「化学的薬理学」と区別して「エネルギー薬理学」と呼ぶ

◎ホリスティック薬学研究会

「各種医学の薬観」～アーユルヴェーダ、チベット医学、メディカルハーブと医療占星術、パラケルスス、ヒルデガルトなど

「エネルギー薬理学の代表 ホメオパシー」

「エネルギー薬理学の神秘 宝石エリクシル(鉱物)」

「エネルギー薬理学の頂点 フラワーエッセンス」

「エネルギー薬理学としてのアロマセラピー(サトルアロマ)」

* エーテル体連続講座

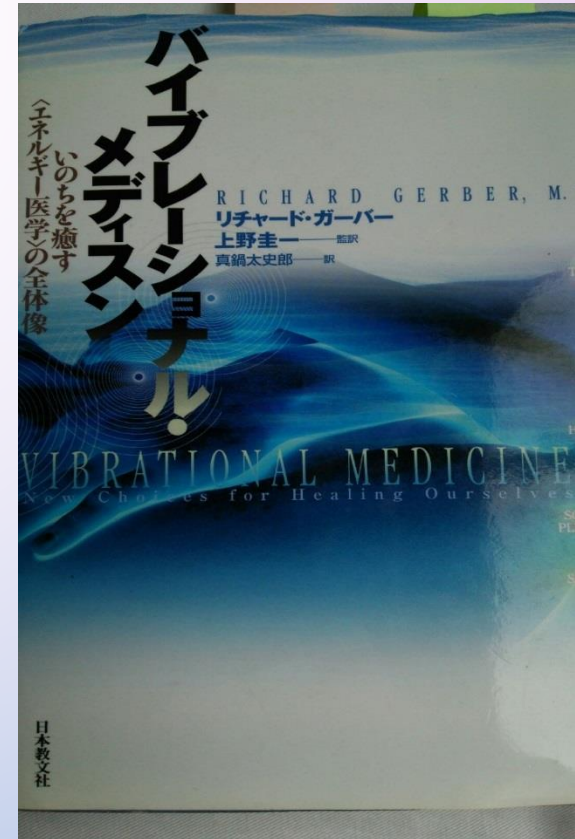
* 錬金術・錬金薬連続講座

(エネルギー)ボディワーク

- ロルフィングのロルフ～「結合組織が全身の各所に存在する」、その基質であるコロイド状のゲルも全身に存在
→「ボディワークの効果」～「ゲルが形を変える」こと
～物理学では、コロイド状のゲルにエネルギーを加えると、ゾルに変化
- 有害物質の放出
ゲル状基質の「ゾル化(脱ポリマー化)」～基質の海綿状の間質に取り込まれていた有害物質が、ゾル化ー再ゲル化の過程で放出される
⇒有害物質や代謝老廃物は「結合組織中に蓄積される」可能性が高い～膠原病
- 線維の密な部分の「運動不足」や「血行不良」
⇒脱水状態を引き起こし、ゲル状の基質を収縮させる
→この部分の細胞には生体マトリックスからのエネルギー(情報)が伝わらなくなる

『バイブレーションショナル・ メディスン』

リチャード・ガーバー著
上野圭一監訳・真鍋太史郎訳
(日本教文社)



上野圭一氏のまえがき

- ガーバー博士の執筆の動機は、公的には「従来の医学からはつよい懐疑のまなざしをむけられている種々の癒しの技法を統一的に説明すること」
- ガーバー青年は元来、分析的・左脳的だったので、通常医学の理論を吸収すること自体に抵抗がなかった反面、一見非科学的・神秘的・形而上的にみえる種々の癒しの技法にも直感的につよい共感を覚えてしまい、矛盾する両者のあいだになんらかの調和点をみいださずにはいられない衝動にかられた、、、
- まず、アインシュタインやティラーによる現代物理学の理論に立脚、次にすべての療法の治療効果を共通語で読み解く鍵として「エネルギー」または「波動」(注:振動)という概念を用いた

- アインシュタインの理論が古典的なニュートン力学を包含しつつ、その適用範囲を拡張した

⇒「『霊』の実在性は科学の法則を否定するものではない。必要なのはただ、物質の高周波次元をも包含するべく、従来の法則を拡張することだけである」と説いている

- 通常科学の用語と神秘思想の用語を同一平面状であつかっている姿勢は大胆

- ラリー・ドッシー、アメリカホリスティック医学協会初代会長のノーマン・シーラー、マリリン・ファーガソンによる熱烈な謝辞、、、ドロレス・クリーガー(セラピューティック・タッチ)、ミッチェル・ゲイナー(『音はなぜ癒すのか』)、アンドルー・ワイル(統合医療)らから「ガーバーはすごい。なぜ翻訳しないのか」と問い詰められた、、、

『バイブレーションショナル・メディスン』

リチャード・ガーバー著、春秋社

第1章 ホログラム、エネルギー、
波動医学—アインシュタイン的生命観

第2章 ニュートン医学VS.アイン
シュタイン医学—医術と医学の歴史的背景(生薬医学VS.ホメオパシー)

第3章 波動医学の誕生—初期のエネルギー医学

第4章 物質の周波数帯と微細エ
ネルギーレベル—人間の多次元解剖学

第5章 微細エネルギー系と古代
の癒しの技法(経絡、経穴)

第6章 みえない世界をみる窓—
微細エネルギー技術の進歩

第7章 波動医学の進化—自然の智慧による癒し(フラワーエッセンス)

第8章 サイキック・ヒーリング—
人間の潜在力の探究

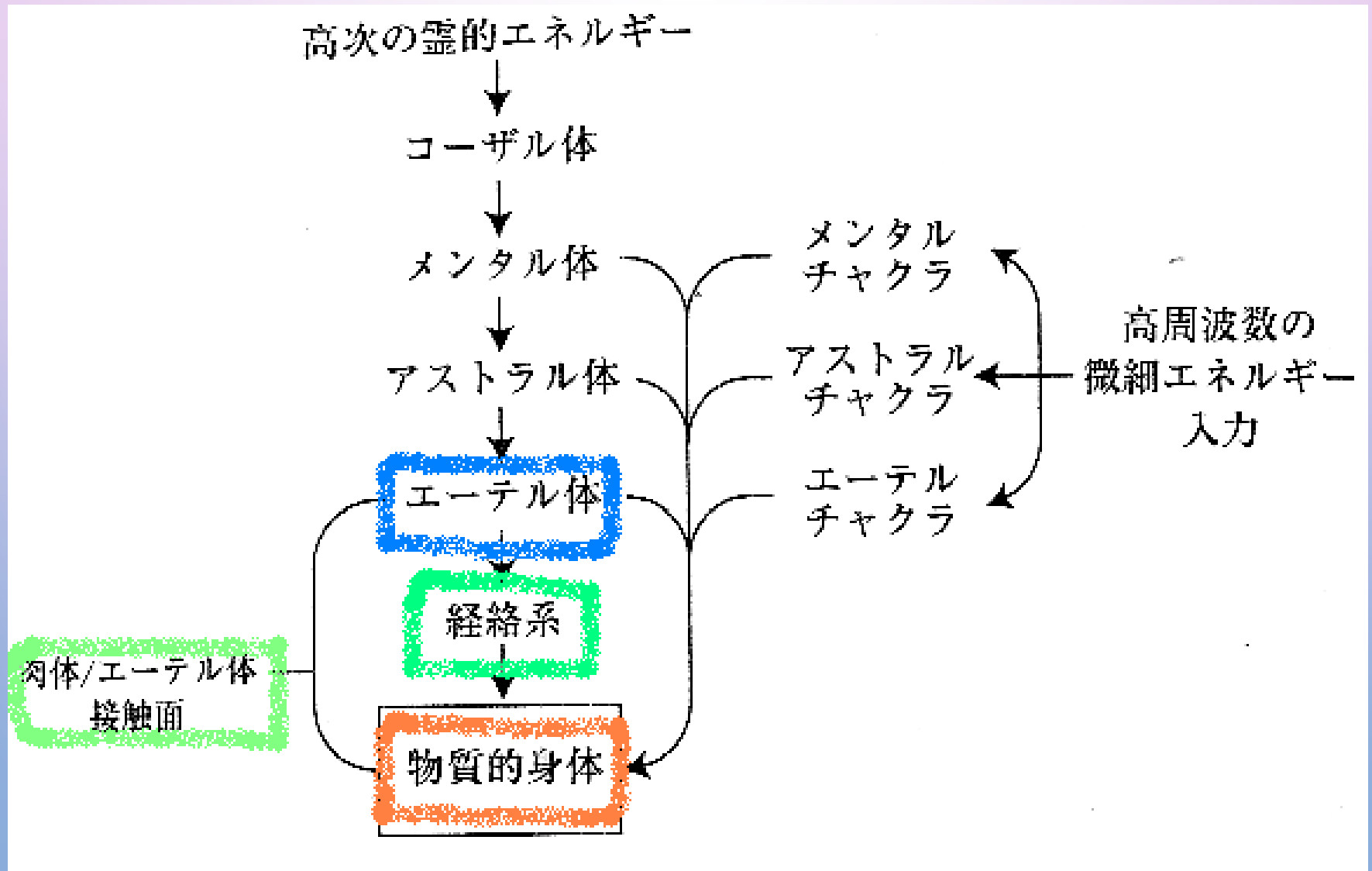
第9章 クリスタルと微細エネルギー系—
古代からつづく癒しのわざ

第10章 むすばれあう生命のネットワーク—
チャクラとはなにか

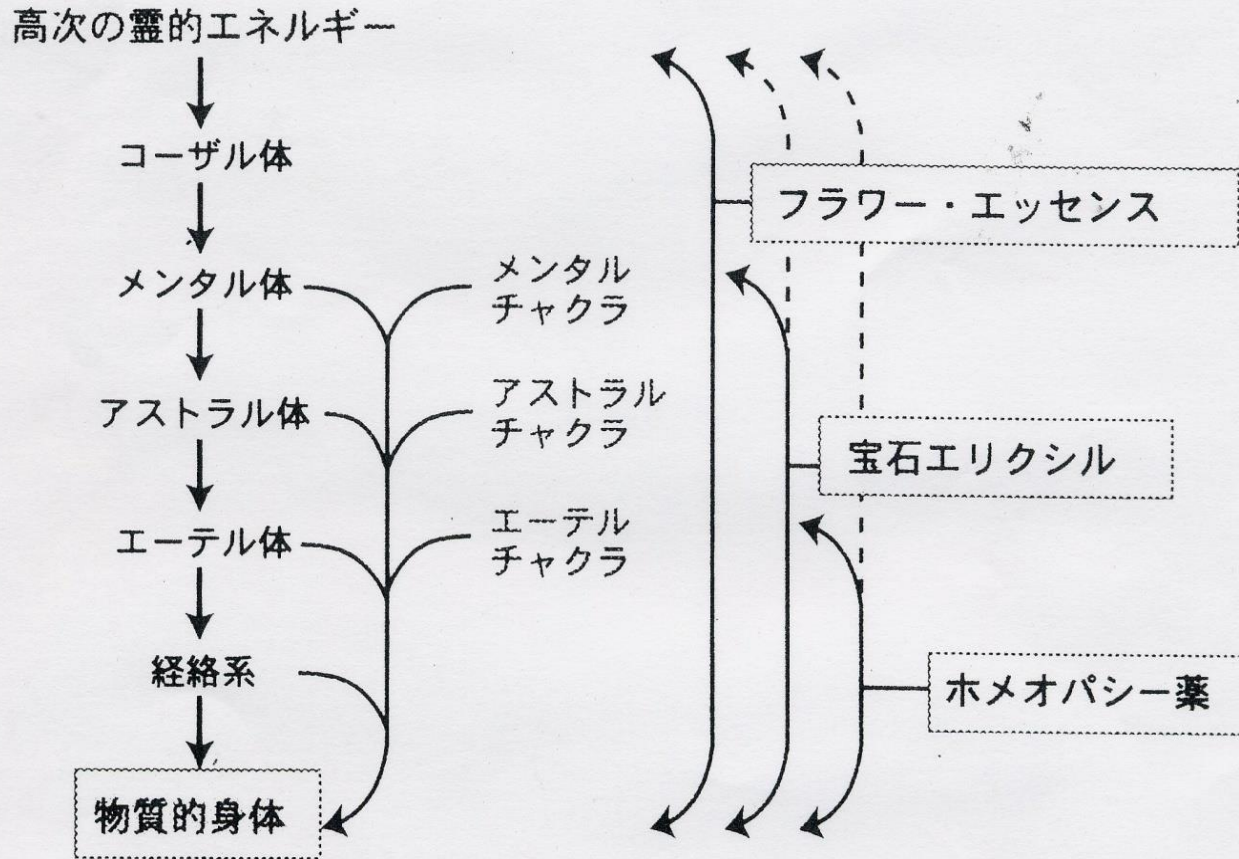
第11章 近未来の医学—
ホリスティックな癒しとパラダイムシフト

第12章 個人の進化と地球の進化—
波動医学と人類の未来

人間の多次元的な構造



波動エッセンスの活動レベル



『バイブレーションナル・メディシン』

リチャード・ガーバー 著 上野圭一・真鍋太史郎 訳
日本教文社

病気とパーソナリティの関係

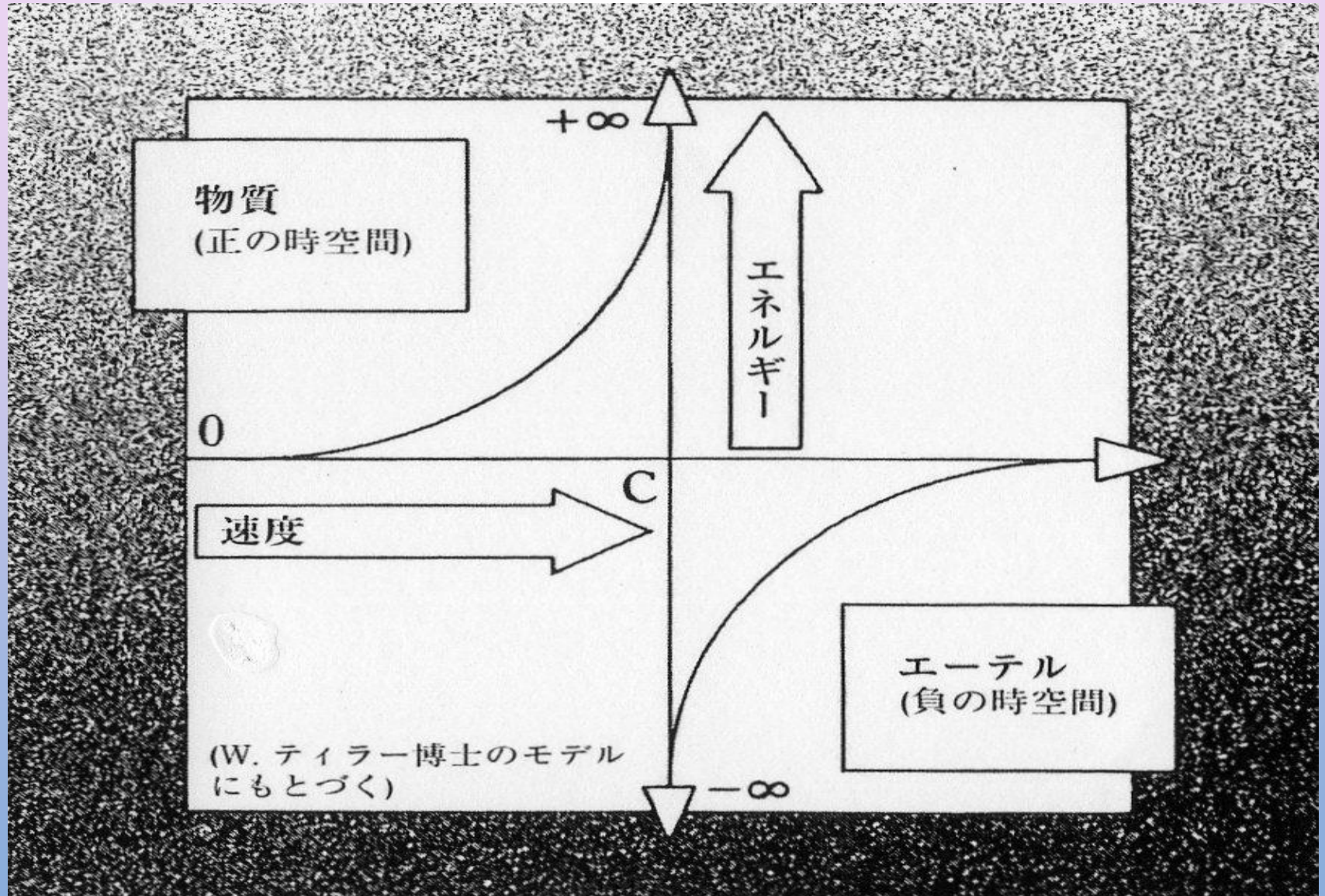
～バッチ博士

- 微細エネルギー身体内部のエネルギーパターン不全の結果が反映したもの
- 病気とはハイヤーセルフ(高次の自己)または魂と肉体的パーソナリティとのあいだの不調和の反映である
- フラワーエッセンスは、その微細な波動エネルギーで機能不全をおこしている情動パターンの再整合を助けている

生体磁気説

- パラケルスス～人体は微細な放射物や、空間をすみずみまで満たしている流動体をつうじて、星やさまざまな物体（特に磁石）の影響を受けている、、、人間と天界とのむすびつきは、微細で浸透的であり宇宙に遍満する流動体、おそらくは「エーテル」の初期的構成物によって成り立っている
- メスメル～患者が治癒したのは、催眠術ではなく、宇宙に遍満する「流体」というエネルギーを利用したせいであると主張。「生命力の流れ」が磁気的な性質を帯びていると考え、「動物磁気」と名づけた

正と負の時空間モデル



マグネティック・ヒーリングから スピリチュアル・ヒーリングへ

• マグネティック・ヒーリング (生体磁気治療)

～患者の体とヒーラーの手の直接的な接触か、水やコットンなどの中間的なエネルギー貯蔵媒体が必要

⇒ 主にエーテル体と物質身体のレベルに作用

• 遠隔治療 (スピリチュアル・ヒーリング)

～ヒーリングが電磁気エネルギーではない証拠 (電磁気エネルギーの強度は距離の二乗に比例して減弱してしまう)

⇒ 磁電エネルギーではエーテルエネルギーは光速から光速の10の10乗倍のあいだの速度で移動する

⇒ さらに高いレベルとも相互作用

「ホリスティック」とはなにか

- ふつう健康やウェルネスという意味で用いられている
 - ⇔ 本来は心とからだだけでなく、「多次元的な霊的エネルギー」も含めた三者のバランスを意味する
 - ⇒ BODY-MIND-SPIRIT
- じっさいには、われわれが肉体として知覚しているこの媒体をうごかし、生命の息吹を吹き込んでいるものは「霊」の力である
- 「霊」の存在を否定または無視する現代医学の体系は、いつまでたっても完成することはない
- なぜなら、人間存在のもっとも基本的な特質である霊的次元をおきわすれたままだからだ
- 医師が医療技術者から脱皮してヒーラーとしての自覚を深めるにつれて、健康を左右する因子としての「霊」が視野にはいってくるはずである

心疾患の「波動医学的アプローチ」

- 心臓を安定させる非破壊的な微細エネルギー環境を整えること
- 波動医学の「治療法」～フラワーエッセンス、宝石エリクシル、ホメオパシー、色彩のもつエネルギー、心臓チャクラに有効なルビーなどのクリスタル、サイキックあるいはスピリチュアル・ヒーリングなど
- 波動医学の「診断」～EAV、ラジオニクス、オーラの観察で患者の否定的な想念形式を検出する方法など

⇒これらは診断者の意識活動の延長なので、医療従事者の精神的/霊的な発達の度合いに依存している

なぜ「意識」がエネルギー医学の究極の鍵なのか？

- どのエネルギー療法も最終的に「意識」へ・・・

「意識」は進化の原動力をなす、ひじょうに重要な因子である。じっさいのところ、意識そのものがエネルギーの一形態なのだ。意識はエネルギーの最高レベルの形態であり、生命という過程に対して統合的に作用している。意識が生命エネルギーの根源的な特性であり、その表現形であると考えれば、「霊」がさまざまな形態の物質と相互作用し、多種多様な物質を通じて外界に働きかけるしくみが理解しやすくなる。じつは、進化のプロセスにもっとも強い推進力を与えているのは、物質世界を旅してまわる「霊」の存在なのである。

ホリスティック医学の方向性

- 基本的には正しい方向に向かっている
- 微細エネルギーレベルの疾患を画像化し、波動エネルギーの不均衡状態を複数のエネルギーレベルで測定する「診断システム」ができつつある
- 未来のドクター/ヒーラー～物質的身体のレベル、感情、心のレベル、霊的レベルのエネルギーバランスのみだれを波動医学的治療、瞑想療法、人間的生長の技法などを駆使して是正し、患者が単なるニュートラル状態から健康へ、さらに人間的生長をへてウェルネス状態へと到達できるように助けていく

量子論は「生体の中でこそ」生かされている、、、

量子物理学



量子化学



量子生化学(生体のタンパク質と水)



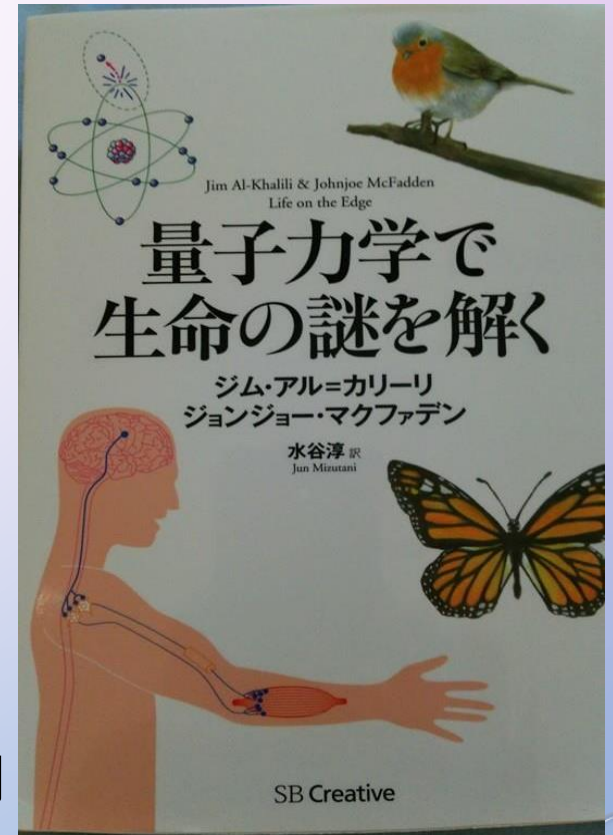
量子生物学・量子解剖生理学(生体マトリックス、サトルボディ)



『情報医療』(量子医学)～エネルギー医学

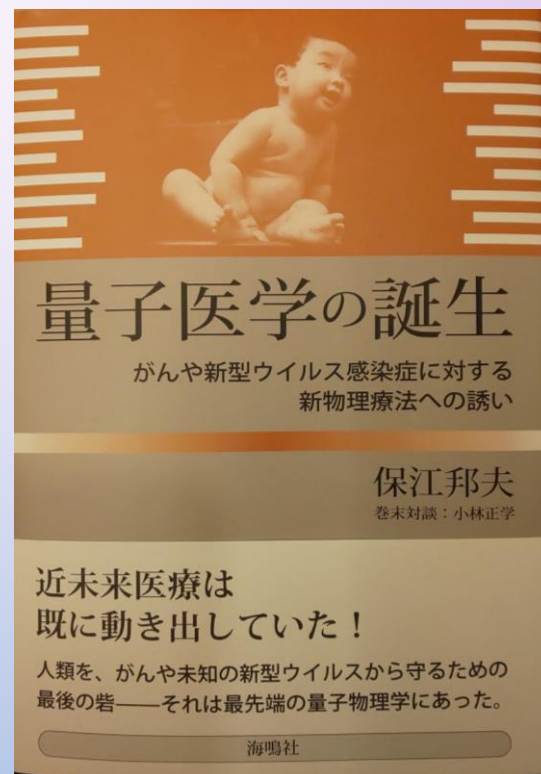
量子生物学

- 現代医学で説明できないものに対して、量子物理学の非日常的な知見を根拠にする見方がある
- 「エネルギー医学」の原理を理解するためには、量子論、量子力学の視点が必要
- しかし、現代医学は「マクロな生物学」の基盤の上に成り立っているため、「量子物理学」の知見はあくまでも「ミクロな物質」の領域とされてきた
- 最近では、この量子物理学の知見が生物という、「マクロ」で「複雑」で「温度の高い」状態でも起こり得るという知見を研究する「量子生物学」という学問領域が出てきた



「量子医学」 ～量子物理学の理論に基づくものをいう

- コロナ禍においてある電子機器(AWGという伝説の機器)の相談を受けたことで「医学・医療」に広がった
- 南部陽一郎博士の「自発的対称性の破れ」理論、そしてその代償のために生じてくる「南部・ゴールドストーン準粒子(ボソン、Quasi-Particle)」＝「バイオポラリトン」や「エバネッセント光(隠れ光子)」など、しっかり書かれている
- 「量子場脳理論」は脳の微小管で生じるメカニズム
→生体全体に適用したものを「量子生体理論」

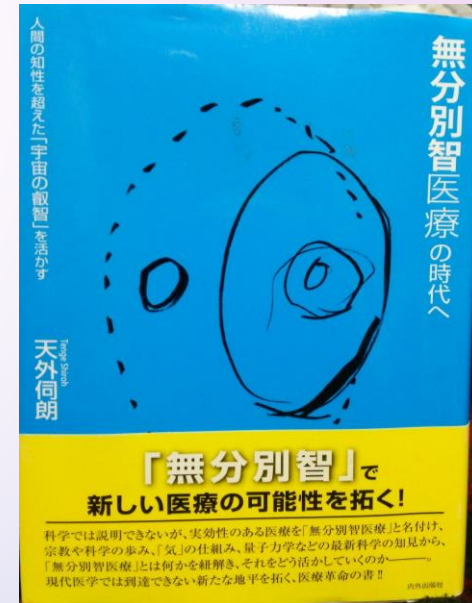


「無分別智医療」と「エネルギー医学」

- 科学で分かる「分別知」ではなく、科学で説明できない「無分別智」という領域があることを明確にした「無分別智医療」を提唱

→「量子物理学」でも説明できない・・・

- これからの医療は「無分別智」をフルに活用する時代に入っていきだろう
- 迷信や思い込みや壺売りに陥らないように、細心の配慮をしなければいけない
- 「気」エネルギーの考え方を提唱



	力の種類	力の大きさ	場	ボゾン	質量
1	重力	1	重力場	重力子	なし
2	電磁気力	10^{38}	電磁気場	光子	なし
3	弱い(核)力	10^{15}	10^{-18}cm	ウィークボゾン	あり
4	強い(核)力	10^{40}	10^{-24}cm	グルーオン	あり
5	気	?	?	(キボゾン)	あり

無分別智医療の種類



1. 身体智 ～生体反射(バイオレゾナンス)、O-リングテスト、ゼロサーチ、ダウジング、打診音、無意識の発汗(パッドの粘り気、電気抵抗)
2. 気 ～外気功、ヒーリングタッチ、遠隔、意念
3. 祈り
4. 身体言語 ～マントラ、真言、易経語、(宇宙語)
5. 物質を代替する発信器のようなもの～抵抗器(ラジオニクスbyエイブラムス)、回転金属格子(レヨメーターbyパウル・シュミット)、単なる数字
6. レメディー ～物質の情報を水などに転写、バッチフラワー、ホメオパシー
7. 目に見えない存在の働き ～仏や王の働き(真言宗)、霊障
8. アカシックレコード ～エドガー・ケイシーのリーディングなど
9. 音 ～打診法、特定の周波数もしくは音色による治療
10. 電磁波 ～特定の周波数(複数)による治療、診断
11. 鉱物エネルギー ～パワーストーン
12. 植物エネルギー ～森林療法など
13. 色 ～カラーセラピーなど

『ホリスティック医学入門』(農文協) 発刊！



○第1章 ホリスティック医学で慢性症状を改善した事例

○第2章 ホリスティック医学の慢性症状との付き合い方

○第3章 自己治癒力を引き出すさまざまな方法

○第4章 ホリスティック医学と出会うには

○第5章 「症状と出会う」ことから「全体的(ホリスティック)な視点」へ

○付録 ホリスティック医学関係の機関一覧

今の医療の現状の2つの問題点

①人間の体や人生についての視点が不足しているために生じている問題

- 現代医学の狭い視野で、物質的な面だけ、また、この世(今生)だけを対象にしているために生じている問題
- 人間は肉体だけでできているわけではない。心や魂(霊性)、さらには、エネルギー体について取り扱わない限り、見えてこない病気の源や対策がある。それが、現代医学に決定的に不足している視点

②不確かなエネルギー療法やスピリチュアル系にはまってしまう問題

- 魂・霊性の問題やエネルギー医学は、人間を丸ごと診るためには欠かせないが、目に見えないものであり、今の科学では証明されていないために、それらに関する不確かな療法も多数存在するのが現状
- 現代医学でエネルギー医学や魂・霊性の問題を扱わないため、行き場をなくして、そうした不確かな療法にはまってしまう患者さんは少なくない。あるいは、どこに行けばよいかわからず、難民化している患者さんも多くいる

『究極のホリスティック医学』

2023.9出版

- バランスがとれているうえにハイレベルなホリスティック医学だと感じている3つの療法
- チベット仏教を基盤にした医学体系である「チベット医学」
- 心理学の一体系である「サイコシンセシス(精神統合)」
- 仏教由来の療法である「ダンマセラピー」

新書 (108×173mm)



書籍『魂の医療』 (ナチュラルスピリット)

- 元々は「エネルギー療法」の書籍として企画された・・・
- 白鳥哲監督、根本泰行理学博士、秋山佳胤弁護士、王由衣氏、森美智代氏、寺岡里紗氏、溝口あゆか氏、光田秀氏・・・



→タイトルが『魂の医療』となる

- その「まえがき」を依頼される

「魂の医療」の必要性

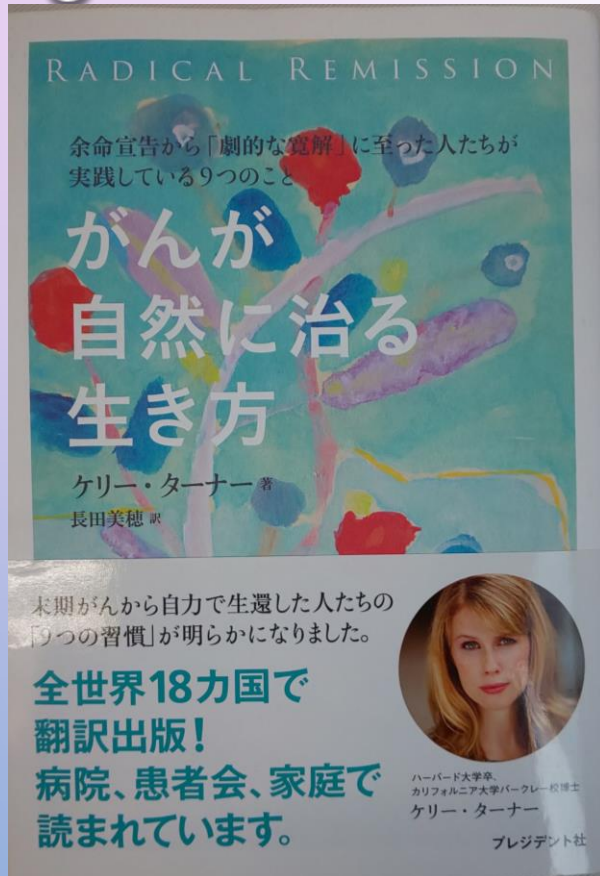
「魂の医療」を意識すると・・・

- 今の時代が重要な要素 —それこそが「魂」と呼ばれる類のもの— を忘れたり、軽んじたままの「人間観」や「人生観」になっていることによって種々の問題を生じさせていることに対して、それなりに警鐘を鳴らすことができるのではないか・・・
- 現代医療では、終末期の「スピリチュアルペイン」「スピリチュアルケア」くらいしかない

- 1、物質ではない「非物質／エネルギー」にも視点、価値観が向く
- 2、「時間」のスケールが「永遠」になる（誕生から死ではなく）
- 3、「空間」のスケールが自然・地球から「宇宙／あの世」にまでなる

～「魂の医療」という表記をすることによって、私たちの視点、価値観が広がったり、深まっていくことになり、そのことによって「本質」につながる面が多々あるといえる

『がんが自然に治る生き方—余命宣告から「劇的な寛解」に至った人たちが実践している9つのこと』 (ケリー・ターナー、プレジデント社)



- ① 抜本的に食事を変える
- ② 治療法は自分で決める
- ③ 直感に従う(注:直観だともっと良い)
- ④ ハーブとサプリメントの力を借りる
- ⑤ 抑圧された感情を解き放つ
- ⑥ より前向きに生きる
- ⑦ 周囲の人の支えを受け入れる
- ⑧ 自分の魂と深くつながる
- ⑨ 「どうしても生きたい理由」を持つ

チベット医学における 「病の源」

○「主因」

- 「直接因(近因)」～ルン(風)・ティーパ(胆汁)・ペーケン(粘液)
- 「**遠因**」～はるかな過去より存在している「**無明**」

○「補助因」～**心のあり方**(過去の心がまえ、煩惱)

- **煩惱** → **カルマ(行為)**を引き起こし、心の中に「潜在勢力(薰習)」
→ 後に実体化して、**病の形をとって現れる**

◎**無明**(諸存在の真のあり方や一切の事象の本質を正しく認識できない心の状態)

- 「**貪り(貧)**」「**怒り(瞋)**」「**無知(痴)**」(三毒)を中心に8万4千の**煩惱**へ
- 8万4千種の病へ(→1616種→404種へ)

チベット医学における 病の分類

- **ルン病**～「**貪り**」の心によって起こる
- **ティーパ病**～「**怒り・嫉み**」や「**慢心の心**」によって起こる
- **ペーケン病**～「**無知**」によって起こる

＜病の4分類＞

○表面的な101の病～投薬やそれに付随する治療を行わなくても、規則正しい生活を送り、「正しい食生活を送るだけで治る」

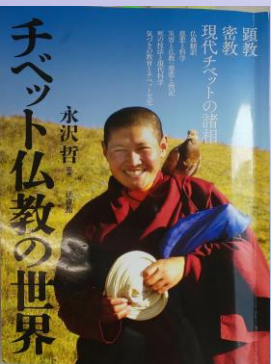
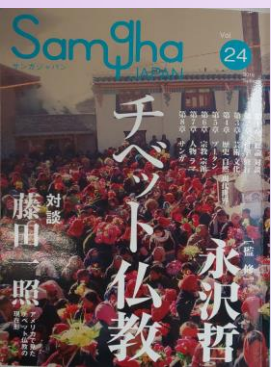
○今生のカルマによる101の病～前半のカルマの結果が後半に現れて病へ。**治療しなければ致命的。医学的な治療だけでなく、仏教上の修行の必要性も**

○過去生のカルマ(行為)による101の病～非常に重い、致命的な病 → 俗世を捨てて**修行生活に専念**、乗り越えられる人はわずか

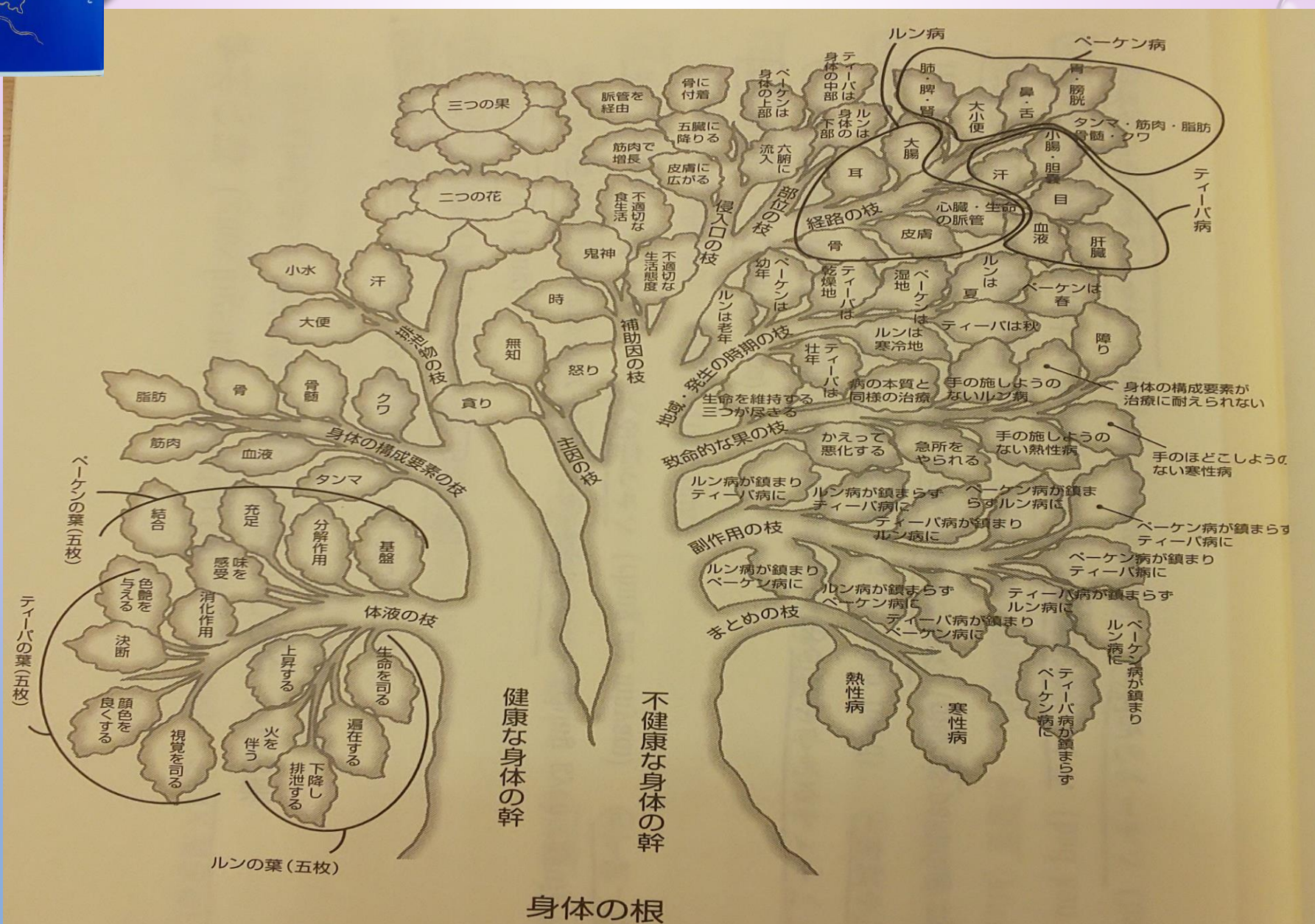
○鬼神による101の病～明確な原因がない→鬼神による祟りの可能性。治療を行っても効き目がなく、**仏教的な手段で**障りとなっている鬼神を折伏すれば治る

永沢哲氏の見解

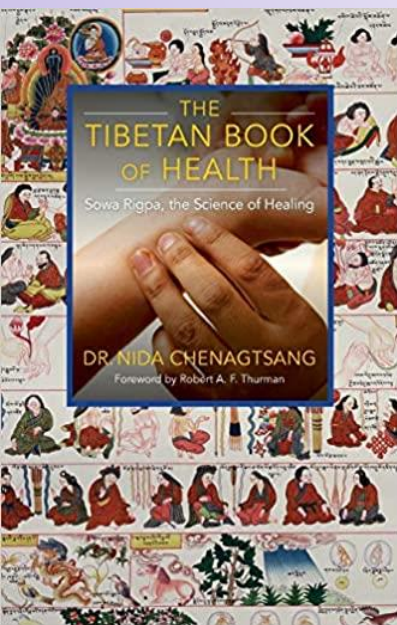
- (仏教の修行によって)「煩悩」から次第に自由になる、それによって、微細な身体を循環するプラーナの運動には、ダイナミックな調和がもたらされ、結果的に肉体も健康になる、と考えられている
- もう一つ重要なのは、治療にあたって、すべての生きとし生けるものの苦しみを取り除こう、またそれが可能になるために、ブッダの悟りを得よう、という菩提心や慈悲が、強調される点だ
- 医師は、みずからが薬師如来であると観想し、患者の苦しみを受け取るとともに、癒しの力に満ちた光を注ぐというイメージを保ちながら、治療を行わなければならない
- 風(ルン)、胆汁(ティーパ)、粘液(ペーケン)の移動する経路や、神経、血管といった肉体の構成要素と、密教修行において駆使される脈管、風、精滴からなる微細な身体の関係について統一的に理解する発展がもたらされた(密教的要素は隠されてきたが、ここ数年関心が急速に復活しつつある)



身体の根

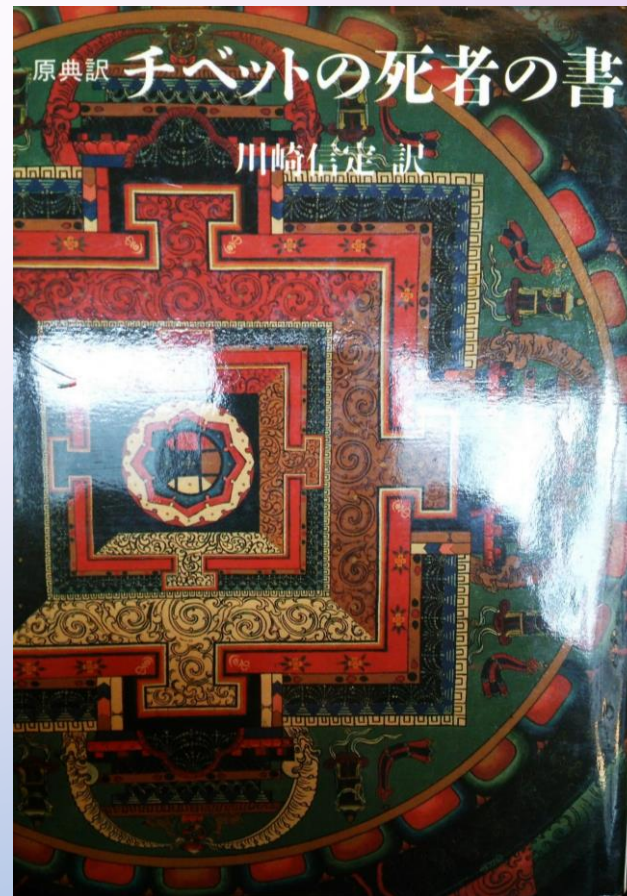


ドクター・ニダは「治療の樹」に5本目の幹 (瞑想・マントラ・ヨガなど)の追加を提唱



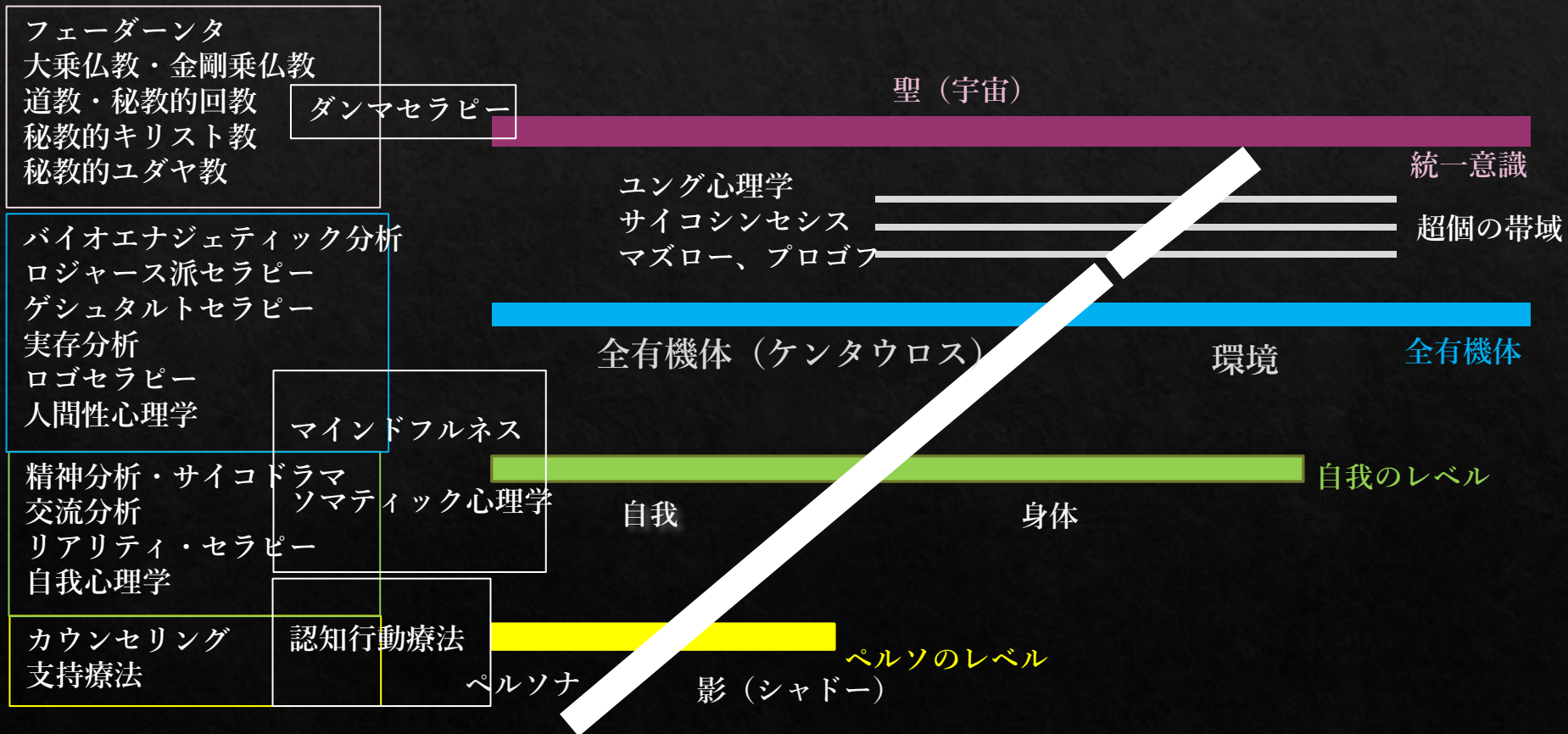
「死」の重要性 ～『チベットの死者の書』から学ぶ

- 死んだときこそが、輪廻転生ではなく解脱するチャンスのときであることを明確に説いている
- 本書は、大きく3巻からなっており、「バルドゥ(中有～死後、新たな肉体を持って生まれ変わるまでの中間状態)」という概念が中心となって展開



諸セラピーと意識のスペクトル

◎ホリスティック心理学研究会



サイコシンセシス(精神統合) ～愛と魂と意志を取り戻した心理学

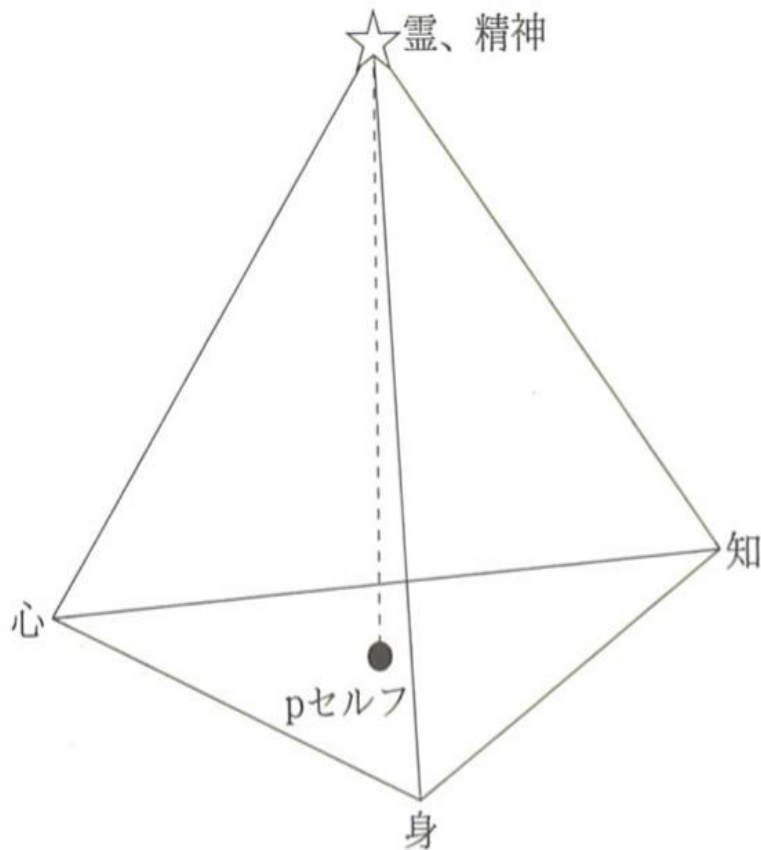


図4 パーソナリティという乗り物

- 1 下位無意識
- 2 中位無意識
- 3 上位無意識 (トランスパーソナル領域)
- 4 意識(気づき)のパーソナル領域
- 5 パーソナルセルフ (Pセルフ)
- 6 トランスパーソナルセルフ (Tセルフ)
- 7 集合無意識

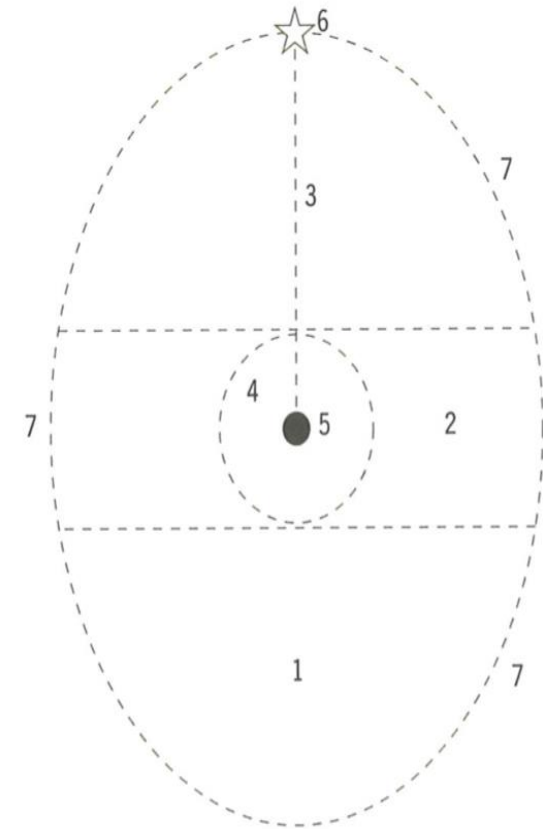


図2 卵形図形



ダンマ(法)セラピー

- 相模女子大学教授で、臨床心理士・行者である石川勇一先生によって、検討・提唱されている療法
- 心理療法＋瞑想法＋ダンマ(法)
一時的な療法を「世間法/世俗諦」～いわゆる「心理療法」
根本療法を「出世間法/勝義諦」～「ダンマ(法)」と「瞑想法」
- 三相(無常・苦・無我)・三毒(貪・瞋・痴)
- 四諦(苦諦・集諦・滅諦・道諦)
- 八正道(正見、正思、正語、正業、正命、正精進、正念、正定)
～マインドフルネスでは1/8以下
- 四無量心(慈悲喜捨)

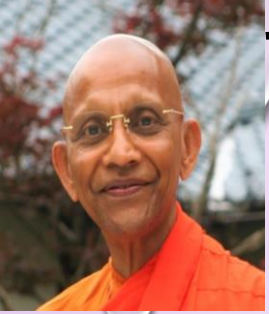


ダンマセラピーはこんな患者さん・治療者に向いている

- 今までの心理療法では満足できないと感じている人や限界を感じてしまう人
- 既存の方法を用いて一時的にはよかったけれど、どうしても解決しきれずにぶり返してしまう人
- 現在の医学では対応できない難病を患っておられる方
- 「生きるとは」「人生とは何か」「死ぬとはどういうことか」などを深く考え、そういうことで苦しんでいる方(実存レベルの悩み)

◎一方、どんな治療者に向いているか

- 今までの通常の治療法(心理療法だけでなく、体の治療法も含めて)では、「どうしても限界を感じてしまう」治療者
- 一時的と感じて、その治療成果に満足できない治療者
- 根本的に患者さんに関われるような治療をしたいと考えている治療者



アビダルマの解説書『ブッダの実践心理学』 全7巻

アルボムツレ・スマナサーラ長老

- 1945年4月 生まれ。イギリス領セイロン（現・スリランカ）出身の僧侶。スリランカ上座仏教（テーラワーダ仏教）長老であり、スリランカ上座仏教シャム派の日本大サンガ主任長老、日本テーラワーダ仏教協会会長
- 13歳で出家、1965年に比丘となった
- スリランカの国立ケラニヤ大学で仏教哲学の教鞭を執ったのち、1980年に国費留学生として来日し、大阪外国語大学語学コースを経て駒澤大学大学院に進学し、奈良康明教授の下、道元を研究



ブッダの説いた 壮大な真理!!

アビダルマ読解の必読書「アビダンマッタサンガハ」を、より分かり易く明解に説いた、スマナサーラ長老の「アビダンマ説法」を収録。ブッダの真実の教え「アビダルマ」心理学の奥義が、現代日常語で鮮やかに説き明かされる。

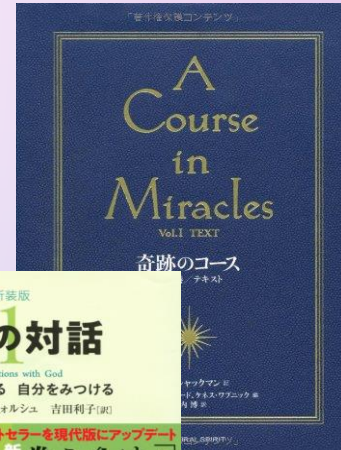
全8巻シリーズ、待望の第一弾！「物質の分析」

サンガ新社

◎「第1巻 物質の分析」はエネルギー論

(上座/テーラワーダ仏教の) アビダルマだけでなく 神仏(儒)習合へ..

- エネルギーの視点 ボディー-マインド-スピリット
 - 信仰ではなく、「心理/瞑想の実践」である(宗教ではない)
 - 神はいない(神々、天界はある~六道にいて解脱してない)
 - 魂と中有(バルドゥ)はない⇔輪廻転生はある
 - 神通(超能力/奇跡)はあるが、価値をおかない
- (チベット/真言)密教 → マントラも使う
- 大乘仏教 → 悟りだけでなく、ゆだねや救いも
- 『神との対話』 → 神も含めて(『奇跡のコース』は??)
- ◎スピリットをもっと → 霊性・神道を取り戻そう
- ◎自然信仰・太陽信仰 → 本当のエコロジーを取り戻そう
- ◎古代日本・縄文の精神 → 自尊心・愛国心を取り戻そう



「秘教治療」

～中心的な治療観

「すべての病気は魂の生命が抑圧された結果である。(中略)

治療家の技術は魂を解き放つことである。

そうすることで、魂の生命は特定の形態を構成する器官の集合体に流れ込むことができるようになる」

「その結果は、完全な治癒かもしれないし、肉体のカルマ的な限定による不利をこうむらずに病気を抱えたまま生き続けることを可能にするマインド状態の確立かもしれない。

もしくは、患者が肉体からの適切な解放を(喜びのうちに容易に)達成し、死の門を通って完全な健康へと進むことを可能にするものかもしれない」

